
お隣に住む死神さん

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お隣に住む死神さん

【Nコード】

N6118C

【作者名】

アオ

【あらすじ】

鬱で会社を休んだ死神と、その隣に住んでいる田中さんの、ある朝の話。

・死神・

うーんと背伸びして、ベッドから降りる。

この頃、死神は鬱気味だ。

会社を昨日から休んでいるのだが、昨日はやることなく、ただふらりと散歩をしていた。

今日は昨日のような失敗をしないように、昨日の夜に計画を立てていた。

仕事が忙しくて、あまり顔を合わすことがなかったお隣の田中さんに「おはようございます」とかなんとか、世間話でもした後に、街に出かけてみたくもない映画を彼女と一緒に見る予定だ。

この頃、死神の彼女はわがままだ。高いバックばかりねだる。今の死神の預金通帳は、すっからかに彼女に食われていた。ホント、こういうのを「金食い虫」って言っんだろうな。

「……………ああっ」

時計を見ると、もう9時だった。

お隣の田中さんは、いつも9時ぐらいになるとどこかへ行ってしまうから早くしないと間に合わない。

急いで寝間着を放り投げ、私服に着替える。

カビカビのご飯を掬って、冷めた目玉焼きを口に放り込みながら、ため息をつく。

「家族、ほしいなあ」

死神は、そう思いながら田中さんだったらしいのに……と、真剣に思っていた。

・田中・

いつもならもうすでに家を出ているはずなのだが、今日は違った。

父がいる。

「……朝ごはんはどうしますか？」と精いっぱいの愛情をこめて言った。

いつもは外国で仕事をしている父は、娘の大学のお金を定期ごとに送ってくる以外は連絡もない。

だから、今日来たのは全く予想できなかった。

「そんな言い方しなくてもいいだろう。久しぶりじゃないか。家族で朝ごはんなんて」

父は笑って言った。

しかしそれは、娘の前の父。

あきな
明菜の前だけの……父。

「明菜、大学はどうだ？楽しくやっているか？」明菜は父の顔を見ないで「まあまあ」とだけ答える。

……明菜も、どうしたらいいのかわからないのだろう。

明菜にとって、父は『家族の他人』だった。
家族だけど、他人のような人。

いつも明菜は、父のことを「あの人」と思い続けている。

明菜は、その人の問いにはあいまいな答え方をした。
右に視線を移す。

母は、震えていた。

この人に気付かれないように、小さく。

そんな母を見て、明菜は父を睨む、と気付かれないように見る。父は……

幸せそうな、顔をしていた。

腹が立つ、その笑顔。

……分かってない。

この人は、全く分かってない。

母の気持ち、

私の気持ち。

「今日は、ちょっと出かけるけどすぐに帰るよ」その人は、そういつたあと、私を見て言った。

「明菜の大学の話が聞きたいな」

母が一瞬、目を見開いたのが視線の端でとらえた。

「あの…明菜は大丈夫。元気にやってるわ」母は私の代わりにこたえる。声が少し上擦っていたが、この人は気づいていない。
父は笑いながら「俺は明菜から聞きたいんだよ」と言った。

私が、

私がどうにかしなければいけなかった。

「……………今日は学校のお友達と街に行って服を買うの。ごめんなさい」

そう言つて、後悔する。

もし、「誰だい？」と聞かれたら答えられないからだ。

私には友達はいない。

それも、父は分かつていない。

少し間を空けて、父の口が開く。

私は息をのむ。

「…そうか…仕方ないな。今日は家にいとくよ」

助かった…。それは、私だけではなく、母もだった。

「じゃあ、私はコンビニに行くわね」そう言つて母が立つ。

母は、この時間になると近くのコンビニで食材を買う。

この人は、それすら知らないのだろう。

「私も、そろそろ行かないといけないから…行つてきまあす」

「いつてらっしゃい」と、蔓延の笑みを浮かべて父が送り出した。

私は、仕方がないから町にいく事にした。

変なことをして、墓穴を掘るようなことはしてはいけない……

先に家を出た母が、知らない男の人と話しているのが見えた。

母の顔を見てみると…笑っていた。

男の人も笑っていた。

…ああ、この人は、お母さんのこと、わかつてる。

そう、思った。

「じゃあ、行つてくるね」そう言つて、私は男の人を見た。

…この人がお父さんなら、いいのに。

明菜は、
真剣に思ってみた。

（後書き）

面白おかしく『死神』を書いてみたかったのですが、もうそれは取られていそうなので『意外性』を求めて書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6118c/>

お隣に住む死神さん

2010年11月19日16時29分発行